Barbe-Bleue

青髯・詩と散文

I

MCMXXXIII

白星社版

青髯

第一年
第一冊

表紙意匠　坂野草史
　　水野時美

ポエジイ

子（詩二篇）……中條雅二……二
骨骼（詩三篇）……平野信太郎……四
林檎を食む（詩三篇）……谷津一朗……六
底なき抗（詩二篇）……花井末勝……八
悲歌（詩三篇）……坂野草史……一〇

エッセイ

春山行夫氏「水」に就て……杉本駿彦……一四

ノオト

「暦と地圖」……佐藤一英……一九

★

青髯の辯……同……二〇

March
MCMXXXIII
白星社版

骨骼

平野信太郎

無數の血脈があるぼくの手
黑い影の動き　落日の氣配
ぼくは恐怖と疼痛を感じはじめる

澄徹な太陽のえつくす光線
ぼくは肺と肝臓を摘出し
ぼくは赤い溶漿に浸る
ぼくの心臓を刺しつらぬく黑い棘

ぼくは吹息と動悸を聽く
ぼくの中に金屬の河が流れ
ぼくの背後に
黑ずんだその骨骼がある

拍車

私の背に
重い拍車の響がある
疾風は私を捧つ
私は疾風を割つてゆく

ひたむきの足搔き
ひたむきの前進！

更に拍車は鳴る　軋む
私はもはや
拍車を恂れ失ふであらう

立ちどまつた私の背に
私の背をつらぬく拍車がある

林檎を食む

谷津一朗

布團は樂しき過去の二人寢を求めてゐた

俺は人の寢息をうかがつて
寢床からはい上つて
部屋の片隅で林檎を食む

皮!!肉!!種!!　狂奔なる知覺!!
「おや」種のない林檎に
彼女はただ者ではないらしい

彼女は何時か云つた
「無花果の味を知らない者は
戀を語る資格がない」と

さうだ
この白い肉から赤い血が流れ出るのを見たときこそ
それこそ彼女は俺の情人だ

俺は獸のやうにあたりを見廻して
部屋の片隅で林檎を食む

現　在

或る人は名古屋は住みよいと言ひ
或る人は名古屋は住みづらいと言ふ

その言葉の中から生れる悲しい暖かさ

ああ、ぼくは悲しい旅人

底なき坑

花井末勝

蒼い天馬が巣喰ふ園か
孟宗竹の籔のほとりで
己の穿つた坑に墮ちた哲學者が顔を出して呻いた。
「犬が行く！」

翹望に疲れ、飯路を忘れ
日のない曠野の果に
黑い狐と假庵を結ぶべく
芦の柱を植へて居つた詩人が
蹌踉、再び歩み出しつゝ、呟いた。
「犬が行く！」

滾々と盡きせぬ白泉の樣に
遠く薄紫の薫烟を吐く底なき坑の底を
禁斷の木の實を銜へて
必死と突つ走る獵犬を見たか

日記

蠟の樣にまづしい日記から
敢て痛苦と云ふ言葉を抹殺した後
夫れに代るべきなにもものもなければ
矢張り「辛かつた」と綴り合せて
黐のついた掌で摑んだ棘をば
捨てあぐむ子供の樣に弄る

悲歌

坂野草史

深夜ともなればこの心情に冷酷な時間が降り積む。今こそ私は零落の日の豫感にふるへて、さびしい血潮の色を見よう。さてまた赤い花ひらく肉體を。

私を譴責てゐる西風は杠谷樹の葉裏で凍えてゐて、破れた蛾の翅のみ光る霧の朝の記憶。あれはいつであつたらうか、いつ私は朝の光を浴びたまゝなのであらうか。すべて荒寥とした夜の中に途絶えてゐて、亞麻色の季節をめぐる記憶の冷たさ。

扉の彼方から洩れてくる微かな物音。そこに積年の秘密が！　あゝ慘虐。爾、稀なる悲業よ！　こゝろ愍然に私は掌を拍つ。その時しらじらと鳴る空間の韻は、既に私の背骨の奥深くより發る。

まるで灰色空のやうに冬。冬の中。ひえびえと私の額に懸るものゝ翳。歌聲ながれ、朔風のやうに肉體をつゝむ溜息はどうしたことか。かほどにも諦念に似た心情であるか。まてしばし私の歌聲。何處へ墜ちてゆくのか私の歌聲。しらない知らない何も識らない。

夜毎、人聲の熄んだ街々に、私はあらあらしい咳聲を流し歩いた。蒼褪めた星影のやうに、獸のやうに。

夜の Operation

いつか風邪に犯されて熱の昂まる夜。Retort に搖れる、星影のしみた液體を想ふ。それは昇華のやうにもの淋しい。Retort の空際に瀰漫する白と赤との血球に就て、私は悲情の斷片のいくつかを識らねばならぬ。

★

青い吹雪が夜の内部を浸す時刻、わたしは創めて東洋の悲劇の面を經驗する。亞細亞の地圖と曆表を描寫する Pen のみ、新らしい哀愁の虜となれ！

★

天にちらばる美はしい雲達。雲達に戀るは木曜の月。

氣流を透して網膜に映つてゐる白い木片は、飾られた橄欖樹の一枝であらう。檸檬色の夜の中では、むかしむかしの挿話と邂逅ふ。それは古風な Romance の一片でゞもあるか。

★

あやしくも淋しい睡眠と、密閉された夢。

★

またしても窓に霧ふる。霧と霧。はげしく私の肋膜を壓迫する霧の斷層。檢温器のやうに冷えて降る霧、霧、霧。ああ、たれかこの頭文字のない憂愁を拂ひ却けよ！

★

夜の背後にはしらじらしい星座の曆程が。私には砂塵に似た時間の音響が。

★エッセイ★

春山行夫氏「水」に就いて

杉本駿彦

名古屋詩壇の曙はいつであつたか。混沌のなかで胎動する時は既に以前からあつたとは言へ、地平線に輝かしい榮光の薔薇のあらはれたのは大正十二三年頃をその限界とせねばならない。そして存在する三つの詩集こそ名古屋の若き人々に與へられた「マナの實」ではなかつたらうか。(＊註一)

大正十三年六月、松下春雄氏によつて瀟洒な裝幀をされた、佛蘭西綴の美しい詩集「月の出る町」こそ春山行夫氏の出發點にあつて把握した Baton であつた。今にして省るに、最も惡きコンディションにあつてあれだけの成功を

收められたことは、僕等の學ばねばならぬ多くのものがあるのだ。強力な意志が先づ第一のものである。次いで向上心、眞摯なる研究的態度。惠まれた健康。これらこそ當代まれに見るところのものであり、春山氏にあつた今日の速度と確實な姿勢をつくりあげたものである。

十年近き日を遡るのは笑止なことかも知れね。しかし春山氏にあつては一日も閑雅なくつろいだ日ではなかつたのである、血の滲むやうな學への格闘の日々、僕は自ら省るに慚愧に耐へぬものである。そして人間の能力の極限の美を春山氏の道程に見て、秘かに範としてゐるものである、

さて、詩集に就いて慨觀するに、春山の意圖は「序に代へて」と云ふ言葉の末節、「私はいつもその故郷を思ふ。そして私はそれを思ふとき、ふしぎに大きな原始の力をそのままに根强く伸びた竹籔をおもふ、そこに幸福をとりかへした父母をおもふ。そして私は、私のなかに遠のいてゆく一つの世界を、あのやうに美しい世界を、ひたすらに歌ふのである。」を見ると過去、現在、未來にわたつて片鱗を示す意志の影がちら〳〵する、

今、僕はこの中から永河篇の「水」をとつて解說を試みたいと思ふ。しかし主情的な態度には得て獨斷を生み易いものであるから、この弊に傾くことがあつたら御寛容下さることを御願ひする。(＊註二)

水

木叢(こむれ)がだんだん黑くなりまさる。
すつかり池の面(も)が盲(めし)ひてしまふ。
(と嘆く水が無智を搖る。)

衰へた枝や流れてゆく重い水草が亂れる。
さはやかにけれどながく空をわたる鳥が羽搏く。
（美しい水底の石や小さな白魚の影を埋めて）

かくて　いまはこの小さな蠟燭が窓を燃くばかり、
死した焰がただ永遠を知つてゐるとばかり、
（おろかな黄に染みた部屋に話しかけやうともしない）。
貧しさよ。無易な時計も老人の外套も假面もない……。
酒もない書物もない。まして月を待つ梢も失はれた。
（たゞ悲しみばかり疾風のやうに腕や毛髪を靡かせる。）

あゝ暗に濕れる。空も樹も水面も僕の心も。
そして空しいこゝろに蠟燭さへ消へかゝる。
（僕は束なした灰色の手箇を燒かうともしないで……。）

解説をするに當つて、方法を決めねばならぬ。僕ほ春山氏の用語の方面から見て、次いで綜合した通解へと移つて行かうとするものである。この一篇は三行一聯から成立つ五つ聯をもつて構成される。美しい形態を示す「水」は誰も

が氣附くであらうが、必ず末行にその聯の總括がなされてゐる。即ち、かくの如き小循環をなしつつ最初の聯と最終の聯とが相關しつつ鎖ざされる。その時、讀者は判然とした形はなくて心情を戰かす疾風のやうな翅を感ずるであらう。その過ぎたあとでペーソスをこめた笛がならされる。そのペーソスは幼いものであらうとも誰しも遲かれ早かれ通過してきた關門であつたのだ。

そして「水」に見える形態は、ひいて今日春山氏の採用されてゐる「Myosotis」「Larousse」の源をなすものであると言つてよい。尙語彙の豐富である點もこの時に既に見える。但、或は稚氣かとも見える振假名の使用法は、最早現在に於ては殆んど見えない。

特殊的な意味をもつものに（黑くなりまさる。）（無智を搖る。）（知つてゐるとばかり）の如き破格のものを交へたものもあるが、大体は想像のつくものである。木叢とは枝のこんもりした所。衰へた枝、落葉した木の枝であらう。白魚、本來は近海魚で四五月頃、産卵のため河川に泝り、淡水海水相混合するあたりに産卵するものであるが、こゝではそれを限定したものでなく、池に浮沈する小魚を指したのであらう。燃く、この用法は面白い。燒くが勿論正しいが、燃燒の意味から注意深く選んだものなのだ。死した焰、消えた焰と同義である。無易な、無益なと云ふ意味に解したらよい。月を待つ梢、希望する心としてよいだらう。蠟燭、生命あるひは希望としてもよい。

第一聯、　こんもり茂つた木叢がだん〳〵黑くなつてくる。又、すつかりと今まで輝いてゐた池の面が眞暗になつてしまふ。（その時最早明さを見ず、天日を思つて嘆く水のやうな思が、心の無智をゆりうごかしそして判然とそれを知らせる。）

第二聯、　秋の終り、葉もなく衰へた樣した枝や水面にあつて重々しく流動する水草が、風にまかされて亂れた思のやうにうごく。空はさはやかではあるが、ながい間翔ける鳥の羽搏きの音がする。（その影は美しい水底の石や小

さな白魚のちろちろたる姿をかくす、僕の心もそのやうに美しかつた過去の思ひ出があるのだが、悲しみの影はそれに不意にふれる。）

第三聯、　かやうにして、僕は今窓を燒くやうに焰をあげてゐる小さな蠟燭のやうな小さな希望と自信とをもつてゐる。これは又、僕の生命にも等しいものだ。例へこれを一瞬にして吹き消す嵐があつたとしても、永遠へと續く時間の一部に於て、この小さな蠟燭の焰をあげて燃えた事實を知つてくれるであらうと思ひ、（おろかしい黄色に染みた部屋に這入らうと無駄骨を折つたり、又、そこに這入るために自分を賤くすることはしないだらうと見向きもしない。その部屋は一見すれば明るく樂しく見えるだらう。これを Vanity と呼ぶ。

第四聯、　僕の貧しさ。そしてそして無益な時計も老人の外套も假面も何物も空しく身を飾るのみのものはないのだ。そして酒もなく書物もない。そして希望を持つ心すらも失はれた。（僕の心を悲しみが、疾風が腕や毛髪を靡かせるやうに吹きすぎて行く。）

第五聯、　あゝ、暗が一杯立ちあがつて何もかも濡らしてしまふ、空も樹も水面も僕の心も。そして今は空虚な心のなかのあの小さな蠟燭さへも消えようとする。（せめて、僕はこの焰のなくなる前に、灰色をした古い手簡のやうな厭な思を燒きつくさうと思つたのに、それすら駄目だ。）

＊註一　佐藤一英氏「詩集　晴天」高木斐瑳雄氏「詩集　昧爽の花」春山行夫氏「詩集　月の出る町」

＊註二　水の題意は決定的なものである漠然たる不安を表さうとしたものであらう。そしてこの點からしてかゝる苦惱を早くも通過してしまつた春山氏の意力ある所を今こそ知る。

千九百三十二年十二月四日午前三時書き終る

「暦と地圖」

杉本駿彦君の詩集

佐藤一英

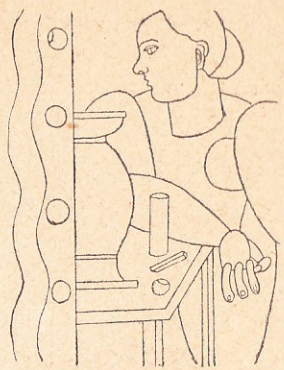
南國的なといつた場合に、人々は情熱的なといふ意味と感能的なといふ意味とを汲みとるに違ひない。杉本駿彦君の詩はこの第二の意味を持つた南國的な詩である。そして第一の意味を持つてゐないことによつて、その詩の世界は南國情調と呼ばるべき性質のものではなくして、肉体の南國である。眼と耳と鼻と肌との南國である。感覺が主宰する線の肩や汗ばんだ砂丘の描く世界であることを意味する。

感覺が君臨する世界だといふのは、それがどこまでも異國情緒的ではなくて現實的——日本的だといふことに外ならない。

ではことさらに南國的と呼ばなくてもいゝわけであるが、それをわざわざ南國的と呼ぶのは、かういふ鮮かな特色を持つた詩人を今まで日本ではあまり見てゐないからだ。一九二〇年代の詩人北村初雄に稍々、似通つた面影を見る位のもので、他にあまり類例がない。北村にあつた南國的なものには情緒的な分子が多かつたと思ふ。杉本君の詩にはそれは極く稀薄により現れてゐない。感覺だけが鮮かである。だから私が杉本君によつて限定した南國的といふ意味は特殊な世界であるが、それはむしろ暖國的と呼んだ方がより適切であるかも知れない……といふのは杉本君の詩を讀んで、先づ感じるのは温感と、ゆるやかな壓感であるからだ。かういふ點から觀て、現代詩人中で對蹠的な人は吉田一穗君であらう。前者が暖かく膨脹する感覺を與へるのに反し、後者は冷たく結晶する感覺を與へる。

表現の手法からいへば、象徴派の影響も著しいが、それ以後の近代感覺主義に負ふところが多いと思ふ。とりわけこの詩人はすべての感覺を色彩に還元しようとする傾向が強い。——鷗の鳴聲や少女の笑聲を夕陽や金魚とともにパレットの上に並べる。從つて杉本君の詩は彫刻的、音樂的といふ要素からは遠ざかる、がここに色彩の音樂といふ言葉をつかへば、多分に音樂的だといへるであらう。

近代の感覺主義が象徴主義から脱けでて、どんな徑路を通つて分化して來たかといふ問題を考へながら、この「暦と地圖」の詩人を鑑賞することは可なり興味あることだらうと私は思ふ。



青髯の辯

旗と三鞭酒

杉本駿彦

今迄何故に新しい詩は文學史家にとつて問題とされなかつたのであらうか。原因となるものを色々考へて見ると、ある時に於ては彼の理解力の不足と言ふことも新精神の認識の不充分であつたと言ふ點も並べ得られることであらう。併しながら次に擧げる事項は誰の責任にしたらよいだらうか。

われわれはここに文法の事を言はうと思ふのである。今迄に文學史家も見、又われわれも既に見てきた多くの作品に於て、日本文法は如何なる位置にあつたのであらう。多くのあまりに夥しい詩人たちは自ら省みて恥づることはありはしないだらうか？、己れが最善として用ゐてゐた文法に誤りはありはしなかつたであらうか。制作するにあたつて果してどれだけの自覺があつたらう。彼等は無知に自然發生的に文字を羅列してゐはしなかつたであらうか。これは大いに問題とすべき事項でありこの點に文學史家の誤解を起させるべき原因が潜んではゐなかつたらうかと、われわれは恐れてゐるのである。勿論、われわれは徒に文學史家に追從するものではない、また過分に理解を求めようと試みるものでもないでのあるがわれわれが無自覺であるために惹起される問題は是非とも警戒せねばならないものである。極言して言へば今迄の新しい詩と呼ばれる作品に於てはあまりにも文法が無視されてゐたことである。これは、われわれは一々指摘するまでもなく非常に煩雜するほど存在してゐる所のものである。

論ずる順序として一つの事項を挿入したいと思ふ。先般、文部省は假名遣改定案を近き將來の小學校に於て實施しようとして山田孝雄博士の攻擊に會ひ、且又雜誌としては國學院雜誌の反擊にあつてゐるさうであるが、この問題を現代の詩人のあひだにもつて來ても相當に面白いものであると思ふ。曾て吉澤義則博士もある論說のあひだに「現代人は餘りに祖先をみくびり過ぎては居ないだらうか。それは現代人の驕慢からか、認識不足からかあまりにも祖先を原人扱ひにしすぎてゐる」と言ふことを述べられた。これを布衍して見

ると、あまりにも現代の詩人たちは日本語を馬鹿にし過ぎては居ないだらうか、長い傳統をもちアウフヘーベンされて來た日本文法に對してあまりにも身勝手にあり過ぎなかつたらうかと言ふことを、われわれは思ふのである異例として、われわれは自覺した日本語を知りきつて破格の用法をする獨自性は問題外に置いて論じてゐるのである。かゝる新しき存在に對しては充分われわれは尊敬し、且その價値は認めなければならない事は知つてゐるのであつて、ただあまりにも多い無自覺極まる詩人たちへ一つの警告を與へる用に供してゐるだけである。

われわれは日本語に對して再認識をせねばならない。世界觀にあつてはもつとも個人に即した見地をとつてもよいと思ふ。われわれが所有する自由の限界内に於ての自由さをとることが出來ようと思ふ。われわれの叫ぶところは制作方法の道具についてである。われわれは言語として日本語から離れることの出來ない宿命をもつてゐる。それを認めてわれわれは出發しようとするのである。

船首には旗がある。

爽快な國歌と共に三鞭酒があけられる。爆發。爆發。爆發。元氣のよい白い泡のなかからわれわれは諸君らに拍手と若い叫びをもつて御挨拶をようしと思ふ。

体操

平野信太郎

つねに、悔恨と焦躁に苛まれてゐる自分を顧る事ほど、この上もない不幸はない。

ひとつの職業に縛られて居る間、彼はいつもその職業と彼自身の性格について煩悶するすると、時に、總ての職業は皆、彼自身から廣い距離があるやうに思はれるのだつた。一生働きつゞけて、唯働く事にのみ彼の人生を費消したやうな人々を考へる時、彼は譯もなく輕蔑の念が起きた。そして彼は失業した。

而し、彼にとつては解放とシノニムでなければならない失業は、それに依つて拘束されるところの、その以前より如何に大であるかと言ふことに依つて、單純に彼を愕かした。

白紙のやうに過ぎてゆく、その無聊の中で、たゞニュースの活字だけが、彼の眼を止める役立つのみだつた。むさぼるやうに、讀みつづけるニュースから、更に彼は、自分の（悲しむ可き狀態）に就いての反省を餘儀なくされるのだつた。いかなるジヤーナリズムもその日の無聊に喘いでゐる人間に對して、些の關心を持つ可く、餘りに活動的であつた。

何かを追ふやうに、そして何かに追はれるやうに、白夢の書は暮れ、病的な夜がやつて來た。その書の中に、そしてその夜の中に、彼は餘りにも赤露々な人間の本能的弱さを感じるのだつた。

その事務所では、毎朝八時に体操が開始された。青い事務服の少女や、洋服の男達が、ビルヂングの屋上に雀のやうに並んで、朗らかに流れるラヂオの音調に合せん、操り人形に似た操作を繰返してゐた。それは、彼の、その事務所に通つてゐた間の、實にあじけない滑稽な時間に屬してゐた。

しかし、今、鈴懸の葉越しに見るその機械的な人間の動作は、彼に、何か確固とした基調の上になされてゐるやうな嚴肅さを與へるのだつた。

閑日落書

中條雅二

眞實の商賣人とは、およそお世辭のかたまりである。御得意先きへ行つては、先づ猫の子までも賞めなくてはならない。

僕も所謂商賣人？である。然し、眞實の商人には、あまりに緣遠い段階に居る。

御得意先きへゆくと、お母ちんに抱つこさたれお子さんをよく見ることがある。そんな場合、僕は完全に商人としての落第生となる——なんとかお上手を言はねばならぬと、あせればあせるほど、白い感情がいよ／＼僕を沈默させてしまふ—。その時ほど、商賣人としての僕を苦しめ、又、僕を寂しくさせるものはない。

◆

「子供つて可愛いものてせう？」しばしば僕は斯ふした質問を受ける。その都度、僕は返答の代りとして微笑で濟ませる。何故なれば僕は、未だに僕自身滿足のゆくお答が出來ないからである。

愚妻の言を借りて云へば「あなたは子供に對して餘りに情がない」——さうである。

事實、僕は餘り子供を抱いたこともなければ、あやしたこともない、泣いてゐても、よく放置しておくことさえあるから、なんと言はれやうといたしかたがない。

然し、つい先日のことであつたが、子供への玩具を購ふべく、三四軒の玩具店を巡禮したものである。

詩集「マクベスの釜」より

坂野草史

復興以後「麵麭」を中心とする京都青樹社同人の行動には注目すべきである試みに從來の青樹社版になる詩集に就て見るに、笠野半爾氏「麵麭の雪」天野隆一氏「紫外線」彌永亥一郎氏「朱門」に於けるが如き、まことに典雅な精神のみ持ち得る一つの方向を、充分可能的に顯示してゐる。殊に彌永亥一郎氏の場合、其のユニークな詩風と共に感じられる東洋的な情緒に對して可成な問題を殘して居ると思はれる。此處では東洋的なと云ふ事が全体の形態に大きな陰翳を與へてしまつたとも云はれるが、兎に角こうした二三の詩集を通じて全く青樹社的なといふ事が云ひ得る程、特異な色彩を創り出してゐる。此の樣な狀態の中にあつて、同じく青樹社出版に系る荒木二三氏詩集「マクベスの釜」が、多分に青樹社的色彩を施されて上梓されてゐる事は云ふ迄もない。これは京都を鄕土とする著者にとつて、幸福な事であつた樣に思はれる。

然し乍ら此の書に示された心理に就て私は時々大きな難關にぶつからなければならない若し私が裏側へまはつて、著者を捉まへたいならば、私は先づ氏の理由を聽かねばならない。——思へば無邪氣に「繪紙を愛つる幼兒」であつた幸福な身にも、いつか繪紙の裏にあるものが身にしみ迫つて來て、その日毎險しさを增す渾沌たる妖氣が、年少な私を窒息させた形であつた。私は俗事にまぎらせてゐた——そして著者は苦しみの年月の後今日此頃やつとまた少しづつものが云へる樣になつたと述懷して居る。

誰が、この心理的悲劇に對して、一つの臺白を與へるのであらうか。此の場合氏の內在こそ最も重要な Motif でなければならない。其處で始めて表へ廻つて、表現上の世界に就て私達は理解し得る。そしてまた挨拶も出來ると思ふ。

既に、心理が Reality の問題にぶつかる時、批判か、さもなくば理解の行爲が心理の上に表はれて來なければならない。此の心理の行爲性が表現體に重大な影響を及ぼす事は云ふ迄もない。即、若し制作に際して、批判的なものゝみを機機として表現を進めた場合、其の結果藝術としての作品に革め得ない生硬な型を殘してしまふかさもなくば心理の逆動に依る宿命觀的なものに墮ちてしまふかの孰れかである。云ひかへれば作品として全體の調和のない畸形な存在とならざる得ない結果に到達する。

發生的にのみものを云ふ事と、批判的にのみものを書くといふ事に就て、私達は嚴密な省察を續けなければならない。こうした嚴密な省察の後にのみ、理解の精神が高揚され得る。理解の精神に於て始めて、私達は完全な藝術へ即入する事が出來る。

こうした意味から、再び靜に詩集「マクベスの釜」の內容に觸れる時、私は、著者のはげしい現實感の堙溢にも拘はらず其の底深く潛入する「かなしみの心」或は宿命的な情意を見逃すわけにはいかない。而も著者の持つ批判的な手法乃至は言語の敍述が此の書の全體に未完成な立體感を與へてしまつたのだと考へる。此は著者の爲に實に惜しい事だ。批判的な心理態度の爲に、反つて著者がおちいつて行つた言語上の錯亂が、著者をしてより苦しみの世界へ導いてゐるのだとも云へると思ふ。

然し乍ら、苦しみの中に、眞實な自らの欲求に依つて、ボエジイの發顯に向つて、良心的な素朴な歩行を再び新にせんとする此の著者に、私はつつましく敬意を表したい。輯中「序歌」「窪地」「午睡」「ゴオグの向日葵」「マクベスの釜」「地獄」「ロシヤのトラクター」「微動」等の佳篇を思ふ時、此の書のみに從つて氏の總てを斷定する苛酷さよりも寧ろ、今後の氏に對してこそ期待すべき位置が約束されてゐるとしたい。盲言多謝とともに、御厚意に對して御禮申し上げます。(1933.March1)

消息

慶事

山中英俊氏　舊臘十二月廿日結婚セラル。謹賀ノ至リ御新婦喜世子夫人

訃

中山伸氏尊父

落合茂氏尊父

御逝去セラル、茲ニ謹ミテ深ク哀弔ノ意ヲ表ス

白星社

中條雅二　詩
小股ひさし　曲
松岡悌二　裝

新作曲謠曲集　第二輯

★　四月上旬發行

發行所　名古屋市中區東郊通一の一五今井方
名古屋雛菊童謠會事務所

青髯 第二年第一冊 昭和八年三月十日印刷納本 昭和八年三月十五日發行 (隔月刊行)

編輯兼發行人 名古屋市中區白川町4ノ2 坂野春浪
印刷所並印刷人 名古屋市中區南呉服2 高橋成弘社 高橋鉄五郎

發行所 名古屋市中區白川町4ノ2 白星社

市内發賣 靜觀堂・文光堂・中京堂・日進堂・青山書店・三松堂・三松坂屋 (頒價十錢)

後記

坂野草史

★ 白星社結成並に運動に就て、序言して置きたい事は、純粋な文學運動團體として、同人七人の手に依つて確立されたもので、今後に於ては文學の純粋性に向つてのみ其の運動を續けたい。云はば從來名古屋に存在する文學的諸團体に對する對立的な位置をもとめるものでなく、より自由な自覺的立場をもつて作品主義に依る、純粋な新興藝術團体として發展して行きたいといふ事である。

★ 從つて機關誌「青髯」は新團体の中心的作品道場ではあるが、此は昨年の「鬪魚」の立場を高揚したものである以上、嚴密な製作精神を以つて、出版を續けたい。

★ 同時に多角的運動として、近々白星社出版として新誌を發刊する豫定である。此は各同人の責任によるもので、既に決定したものに、平野君の「火蛇」がある。

★ 其他の計畫に就いても漸次發表實行して行きたい。實に混沌極りなき現名古屋詩壇から、新鮮無比なる自覺團体の出現を見た事は責任者として無上の悦びである。

★ 同人杉本駿氏に依つて、毎號名古屋詩壇出身の著名詩人の作品に就て、批評解說を續けて貰ふ今號の春山氏に就ては既に言葉を挿む必要はあるまい。それ程文學の名のある處春山氏の名ある、氏の存在性は、ラジカルな實數である杉本氏のエッセイによつて再び新らしく、春山氏に接し得る事と思ふ。次は佐藤一英、高木斐瑳雄氏

★ 第二號よりは山中英俊君の、颯爽たる作品にも接し得る豫定である。「青髯」今後の純粋な發展に對して、同人七人はより堅實な自覺的行動を進めるであらう。

受贈詩集

荒木三三氏著 **マクベスの金** 京都 青樹社出版

member.

坂野草史	名古屋市中區白川町 4ノ2	
中條雅二	名古屋市中區若狹町 1ノ10	
花井末勝	名古屋市南區熱田東町外土居 12ノ1	
平野信太郎	名古屋市東區千種町元古井 242	
杉本駿彦	愛知縣東春日井郡旭村印場1636	
谷津一朗	名古屋市中區梅川町26荒井方	
山中英俊	名古屋市中區南伊勢町1ノ6	(ABC順)

第一回

美術新選手作品展覽會

3月23日——27日
公園。美術館ニ於テ

B.S.S

西村千太郎
尾澤辰夫
水野勝美
下郷羊雄

ジムナアズ

〔Gymnase〕

美術新選手機關紙 3月20日創刊・年四回刊行 名古屋に於ける最も新しい美術雜誌 創刊號 第一回展覽會記念特輯號

美術新選手事務所
名古屋中區矢場町三ノ切西村方

Bulle-Bleue 青 潮（隔月刊行） 昭和八年二月十五日印刷納本 昭和八年三月十五日發行

價 十 錢